

THE GOLDEN MASK MIKI HIROSE

1. The Golden Mask —dedicated to “Tower of the Sun”
2. September in the Rain (H.Warren)
3. Moonrise
4. Orange Osmanthus
5. You’re My Everything (H.Warren)
6. Three Birds
7. Triennium
8. Days of Wine and Roses (H.Mancini)

All compositions written by Miki Hirose except described

Produced by Akiomi Hirano

Recorded at NK SOUND TOKYO
on 16 March 2020

Recorded & Mixed by Neeraj Khajanchi
2nd Engineer: Norihiko Katsumata
Mastered by NK@AQQA Mastering

Art Direction & Design: Hiroshi Kurisaki
Photograph: Takeo Hibino

Special Thanks: Taro Okamoto Memorial Foundation / Tatsuya Yuki



瞬間に賭ける音

広瀬未来との出会いはとつぜんでした。2018年10月、片倉真由子のリーダーライブを聴きに南青山「Body&Soul」に出向いたときのこと。幕が開き、店内に上質な2管サウンドが響き渡った瞬間、ぼくの意識ははじめて眼にするトランペッターに釘づけになりました。

1曲目のテーマを聴いただけで並のラッパ吹きでないことはわかったのですが、つづいてソロがはじまると、その威力と説得力にぼくはのけぞりました。なにしろそのときまで広瀬未来の存在さえ知らなかったのですから。

シャープなのに分厚く深い音色、鋭敏でスリリングなフレーズ、抜群のタイム感、歌心……。あらゆる要素が高い水準でバランスし、うねりとなって聴き手に迫ってきます。

最初のソロで体内の“ジャズ・センサー”が振りきってしまったぼくは、「あの男のアルバムをつくりたい!」との衝動を抑えられず、終演後すぐに声をかけました。翌月には上京した彼をつかまえ、その日のうちに「山口真文を迎えた2管クインテット」という構想が固まります。広瀬さんはオーケストラからヒップホップまで多彩な引き出しをもっているけれど、今回はストレートアヘッドな王道ジャズを演ってもらうことにしたのです。

それから1年4ヶ月。種々の準備を整えた広瀬未来が満を持して臨んだのがこのアルバムです。

1984年生まれの広瀬さんは、黒田卓也、西口明宏、中林薫平らを輩出した甲南中学・高校のブラスアンサンブル部出身。中1で入部すると、あてがわれたトランペットに熱中します。「習ったのは先輩の高校生。顧問の先生がびっくりするほど放任主義だったから、自分で模索するしかなかったんだけど、その経験がいまも役立っています」という状況を変えたのが、高2で出会ったトランペッター嶋本高之でした。10年ものあいだNYで活動し、帰国したばかりの嶋本さんに「そんなふうには適当に吹いていたら、上

手くれないぞ」と諭され、師事して一から勉強し直したのです。

高校を出るとすぐに重鎮ベーシスト・宮本直介に迎えられてプロの道に。1年半後にはNYへ渡り、本場の空気を吸いながら、無我夢中で練習に没頭します。2年が過ぎた頃に一旦帰国し、1年半ほど日本で活動するもふたたび渡米。それから8年をNYで過ごしました。「日本での仕事は安定しつつあったんですが、どうしても自分の演奏に納得できなくて。最初のNYで高いレベルを見てしまったからかもしれません」。広瀬さんはそう言うと、次のように話してくれました。

「1年半日本に帰ってNYに戻ると、かつて同時期にNYに出て来た“同期”たちが忙しくしていました。でもぼくには仕事なかった。ひたすら練習し、ビッグバンドの譜面整理などをしながら食いつないだんです。悔しかったけど、いま考えるとそれで良かった。あの経験がなかったら、いまのぼくはないのだから」「そのうち徐々に仕事も増え、好奇心からラテンやヒップホップにまで手を出しました(笑)。いろんな現場や音楽を経験できたことが財産です」。

2014年に帰国。彼はいま日本にいるけれど、視線の先にあるのはNYです。とはいえ、「向こうの人みたいになりたい」と願っているわけではありません。憧れではなく、おなじ土俵で闘う者としてクールにウォッチしているのです。

レコーディングメンバーはいずれも日本ジャズ界のトップアスリートたち。

サクソの山口真文は1946年生まれの73歳。1970年代から日本のジャズを牽引する現役バリバリのマエストロです。なぜひとり世代の異なる山口さんを起用したのか? そう問うぼくに、広瀬さんは即座に「とんがっているから」と答えました。

「ぼくらが“ここらまでいけば上出来や”と考えている地点が、真文さんは眼中にない。射程距離が我々の世代とはぜんぜんちがうんです。レコーディングのときも、“おお、いい

感じや”と満足していたら、真文さんはもっと遠くまで行っていた。リミッターが壊れているんじゃないかな、あの人(笑)と。

ピアノはDays of Delightとも縁の深い片倉真由子。日本ジャズ界屈指のピアニストであるだけでなく、山口真文バンドの一員としてライブやレコーディングにも参加してきた彼女は、山口さんとの相性も抜群。真っ先に彼女をブックングした広瀬さんの気持ちはよくわかります。

「ジャズとともに生きる彼女はなにがあっても逃げない。だから彼女が加わることで、バンドのサウンドにしっかりとした“核”ができるんです」。

学校の先輩でもある中林薫平は、あらゆる意味でバランス感覚にすぐれたベーシスト。「つねにボトムをキープしてくれるので、そこに居てくれるという安心感がある。いっほうで行けるときには一気に飛び立ってくれる。持ち場を守るときは守るし、行くときは行くし。その状況判断がすごい」。

ドラムの山田玲は、20代の若さながらシーンの先頭を走るファーストコール・プレイヤー。「演奏の勤が鋭い、グルーブが強力など、すごいところはいろいろあるけれど、なんといつても音色がすごい。なにを叩いても彼の音がする。なによりぜんぜんうるさくない。あれほどうるさくないドラマーはまず居ません」。

独特の質感とダイナミズムを備える広瀬未来のサウンドにほくが感じるのは、ある種の「潔さ」です。手堅く器用にまとめようとせず、思い切り自分を吐き出しているように見えるし、どこか群れから離れている感じもある。そうした態度が、彼の存在を際立たせているのではないかと思うのです。

「みんな自分の弱点を隠そうとするでしょう？ 恥ずかしいと思って。でもほくは平気。みんな気にし過ぎなんじゃないかなあ」。広瀬さんはそう言ったあと、トランペッターが

「バテる」ときの話をしてくれました。

「バテる」とは、腫れたり血流が悪くなって唇が震えなくなり、音がかスカスになったり、出なくなったりすること。大声で叫びつづけると声が枯れるのとおなじで、長時間吹いていればだれでも必ずそうなるという、トランペッターの宿命です。いわばガソリンのようなもので、当初は満タンでも残り時間がどんどん減っていくのです。

ゆえにライブでは、最初から飛ばし過ぎると、2セット目の終わりにはガス欠になっている可能性が高い。カスカスの音は汚券にかかわるから、多くのトランペッターは飛ばし過ぎないようにセーブします。エネルギー消費量を“マネジメント”するわけです。

「でも、ほくはそれをやったことはありません。最初からフルスロットルで飛ばす。それをずっとつづけてきました。ほくのタンクが40Lだったとしたら、毎日40Lを使い切った。そのおかげで少しずつ容量が増えていったような気がします」「もちろんガス欠になる日もあります。ほんとうに申し訳ないことだけど、正直、ほくはそれを“しょうがない”と考えているんです。サボって出なくなったわけではなく、スピードを出し過ぎて出なくなったわけだから」。

これが広瀬未来のジャズ観です。全体を俯瞰してマネジメントするのではなく、瞬間に全力をつくす。万一のときは深く倒れることを覚悟の上で、いまこの瞬間にすべてを賭ける。行動原理はじつにシンプルです。

だってジャズは「瞬間の芸術」でしょ？ きっとそう考えているはず。それがジャズミュージシャンとしての、広瀬未来の“生き方のスジ”なのです。

平野 暁臣 (Days of Delight)
Founder / Producer